

WORLD MAJOR STANDARDを目指し、IGF芝管理コンサルタント デニス・イングラム氏とコースコンディションについて、入念にミーティングをおこなった



写真提供:霞ヶ関カンツリー倶楽部

東京オリンピック ゴルフへの想い



©IGF

霞ヶ関カンツリー倶楽部でのトップアスリートによるメダルをかけた激戦から1年あまり。その熱戦は、私達の中に鮮やかな記憶として残されています。この東京五輪ゴルフ競技の開催は、新型コロナウイルスの影響で史上初の1年の開催延期や無観客開催など、誰も想像しなかった事態に見舞われる中、各関係団体が叡智を結集し、多くの困難を克服して実現したものでした。当時、日本ゴルフ協会オリンピックゴルフ競技対策本部長を務めた永田圭司顧問の東京五輪ゴルフ競技への思いを掲載します。

オリンピックでのゴルフ競技復活と日本ゴルフ界の対応

2012年、ゴルフの更なる振興策として、世界のゴルフ界がオリンピック競技への復活を熱望し活動してきた成果として2016リオオリンピックからそれが実現する事が決定されました。一方で同時期、2020年大会の東京招致活動も、3候補地の一つに選定され最終実行計画(実行ファイル)の提出が求められ、ゴルフ競技会場も具体案を決定する必要がありました。

日本のゴルフ界としてこれらに対応する為、ナショナルフェデレーションである日本ゴルフ協会(JGA)にオリンピックゴルフ競技対策本部を設置し、メンバーには日本プロゴルフ協会(JPGA)、日本ゴルフツアー機構(JGTO)、日本女子プロゴルフ協会(JLPGA)、有識者の参加を得てオールジャパン体制で臨む事となりました。

対策本部に求められたミッションは大きく分けて2つ。一つは日本オリンピック委員会(JOC)と協力しての選手強化とメダル獲得のための支援。もう一つは東京オリンピックゴルフ競技実施に向けた諸準備にオリンピックゴルフ競技を主管する国際ゴルフ連盟(IGF)と東京招致委員会(のちに組織委員会)への協力、支援でした。

想像外の1年延期と無観客開催。

不安と安堵、無念と感謝が交錯した2週間

こうしてスタートした東京オリンピックとの関わりですが、9年後に迎えた東京オリンピックは、新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、一年の延期を経て、さらに開催さえ危ぶまれる非常事態宣言の中で、無観客での開催という想像だにできなかった事態となりました。「各国を代表するトップアスリートのパフォーマンスや、世界メジャー基準の大会運営を、できるだけ多くの方に直に全身で感じて欲しい。それが日本のゴルフ界にとってのレガシーそのものになる」との想いで準備してきただけに、無観客での競技開催は私自身の中でイメージをすることが出来ず、無念さと不安を抱いたまま開幕を迎えました。2週間にわたる競技はあっという間に過ぎて、最後には稲見萌寧選手の銀メダル獲得の表彰式で喝采を叫びたい反面、複雑でなんとも不思議な感覚でその様子を眺めていました。もし有観客だったら、この18番ホールはどんな興奮に包まれていただろうかという想い。コロナ禍という未曾有の状況下で無事終了出来たという安堵の想い。代表選手達の素晴らしい戦い、とりわけ日本代表選手の健闘が無観客という状況を越え感動的な

大会にしてくれた感謝の念。そしてもう一つ、幾つもの困難を乗り越えて素晴らしいコースと完璧なコンディションに仕上げたオリンピックゴルフ競技会場の重責を果たしていただいた霞ヶ関カンツリー倶楽部(以下KCC)への感謝の念。様々なことが積み上げて交錯していたのだと思います。

東京オリンピック開催決定。

KCCがゴルフ競技開催コース第1候補に

振り返ると、東京オリンピック招致委員会(当時)から招致活動の最終実行計画(実行ファイル)の作成にあたり、JGAにオリンピックゴルフに相応しい会場の推薦依頼があったのが2012年でした。JGAオリンピックゴルフ競技対策本部東京準備委員会において検討に入りました。

与えられた条件として、開催都市東京の都心から50キロ圏内、競技を主管するIGFの要求する基準に副える事が示されました。

委員会では当初50キロ圏内のゴルフ場から50コースほどの候補を挙げ、そこから絞り込みを行いました。IGFの意向としてゴルフ4大メジャーに匹敵するもう一つの価値を持つ大会にしたいという希望も届きましたが、当時IGFにとってもオリンピック競技の開催基準は手探り状態でした。オリンピックにゴルフが復活すると言っても100年以上ぶりですから、誰にとっても初めての経験なので致し方ない事でした。幸いなことに、同時期にIGF主催の世界アマチュアゴルフチーム選手権が2014年に軽井沢で行われる事になっており、JGAとIGFは共同して準備にあたっていたので頻りに連絡を取り合っており、オリンピックの開催基準についてもニュアンスを確認し合いながら作業を進めました。(現在はほとんど明文化されている)希望観客数、メディアセンターや放送センターの規模、アクセス、男女競技を2週間同一会場で行う、などの諸条件が見えてくると候補コースも自ずと絞られてきました。日本オープンなどの国内メジャー大会の施設規模の3倍ほどの諸施設を満たすには36ホールの敷地規模が必要になることも確認しながら、著名な専門家やプロゴルファーを含む委員会のメンバーの議論の末、「霞ヶ関カンツリー倶楽部」を第一候補とすることになりました。この間IGFとの間で頻りに使われた“WORLD MAJOR STANDARD”という言葉(概念)が、後の苦労の元になっていきました。

この準備委員会の推薦に基づいて、招致委員会への答申、KCCへの依頼、そしてKCCでの受諾の機関決定、IGFの承認、IOCの承認とプロセスを踏んで、東京招致委員会の実行ファイルにゴルフ会場としてKCCが記される事になりました。

しかしこの時点では東京招致成功の確率は低いとされており、2013年9月に「TOKYO」が決定されるまで推薦の重みを実感してはいませんでした。

2020年大会の開催地が東京と決まると、運営の組織も東京招致委員会から東京組織委員会へ引き継がれ準備が加速しますが、KCCではかねてより計画され準備されていた東コース改修と言う大事業をKCCとして行い、オリンピックゴルフ競技を迎え入れる決断がされました。トム・ファジオ氏による改修は東コースの佇まいは残しながらWORLD STANDARD化されたものとなり、今回多くのトッププレーヤーの賛辞に繋がったと思います。

”WORLD MAJOR STANDARD”への苦悩

準備は着々と進んでいきましたが、いくつかの課題も提起され、その対応に追われる時機も経験しました。女性正会員不在の問題解決にもKCCには英断をして頂く事になりました。しかしこの課題も時代の流れの中で避けて通れないものだったとも思っています。暑さ対策に関してはIGFの見解は当初よりゴルフは最も色々な対策を講じられるスポーツであり問題視しないことで一貫していました。しかし、“WORLD MAJOR STANDARD”を掲げるIGFと日本側の解釈の隔たりは準備が具体化するにつれ顕著化しました。先ず練習場が課題となり、ここでは練習場の持つ意味から双方の違いが浮き彫りになりました。IGFの300ヤード以上、25打席以上、競技コースと同一のコンディションなどの要求を満たすには、西コース18番ホールを当てる結論になりましたが、芝の張り替え作業まで含む為、大会期間中だけでは済まず長期間変則的な18番ホールの運用をお願いすることになってしまいました。IGFの要求はコースの練習場のあるべき姿ではありますが、立地条件の悪い日本のゴルフコースでは非常に難しく、日本ゴルフ界の今後の課題として残りました。

コースコンディションについても、数値や明確な言葉で表せないニュアンスを含んだ”WORLD MAJOR STANDARD “に悩まされることになりました。IGFから派遣されてくる競技運営担当者はUSPGAツアーの実務者達でしたので、彼らの持つニュアンスはそれを背景としたものでしたし、基準となるコンセプトを問うと、「それはプレーヤーにとってフェアであること」とまた抽象的な答えが返ってきました。キーワードの解釈が難しい上に元々言語の違いによるコミュニケーションの難しさもあり、お互いが歩み寄って作り上げていく作業は本当に大変だったと思います。

KCCの深い理解と全面的な協力が 最高の舞台へと繋がる

結果として最高の評価を受けたコンディションに仕上げていただいたわけですが、やはり6月からの完全クローズにご協力いただいたKCCメンバーのご理解があつての事と思います。2ヶ月間でのコースコンディションの改善は目覚ましく、渋面だったIGF担当者のウイックが忘れられませんが、グリーンキーパーはじめ、JGA加盟倶楽部にお問い合わせいただいたコラボレーターの方達も含め現場の皆さんのご苦勞の賜物であったと思います。

また、この時期、IGF側とも”face to face”のコミュニケーションがコロナ禍の制限の中でも増えた事、お互いのノウハウが現場で融合した事も大きく寄与したと考えられます。

そして間近で仕上がったコースを見てみると、曖昧だった「世界のメジャー基準」「フェアなコース」の意味も解ってくるように思われました。この体験はKCCにとっての財産であるのは無論のこと日本ゴルフ界にとっての財産になるものと感じました。

これらのことを考え合わせれば、2020東京オリンピックゴルフ競技は、緊急事態宣言の中で行われた状況下では、無事に競技を完遂し、日本のゴルフ界に多くの無形のレガシーをもたらしたことに成功だったと言えると思います。

しかし、私には無観客で行われたオリンピックは、舞台と役者は揃えても大切なものを欠いた無念さの方が優っています。目に焼き付いているトッププレーヤーの空気を切り裂く異次元の弾道や、KCCのコースも直に見て感じて頂きたかったと残念でなりません。無観客になったことで中止された企画や交流も多くその面でも心残りは否めません。

デニス氏とコラボレーターによるフェアウェイの芝刈りについての打ち合わせ。
コミュニケーションの積み重ねが最高評価のコンディションにつながった



写真提供:霞ヶ関カンツリー倶楽部



10番ホールでティショットを打つ稲見萌寧

トップアスリートのオリンピックへの思いが特別な大会に

ゴルフ競技は予定を大幅に上回るTV放映がなされ、松山英樹選手がメダル争いした男子最終日のTV視聴率は20%を超え、稲見選手のメダル獲得時は17%という高視聴率となっており、日本全国でTVやネットを通して大きな応援があつた事が伺えます。また、視聴者から「ゴルフは厳しいスポーツだと感じた」「屋外環境でできる素晴らしいスポーツだと思った」といった類のコメントも多くあつたとも聞いています。ゴルフが正しくスポーツとして認知される上でも大きな機会となりました。

加えて、競技会場であるKCCに対しては参加選手達からも、コースの質、コンディションに多くの賛辞がありました。TV画面を通したKCCの美しさには、国内のみでなく世界中から、高い評価が寄せられており、KCCの素晴らしさも十分に発信出来たのではないかと考えています。

ゴルフやテニスでは、時折、オリンピックより4大メジャー大会の価値が高いと位置づける向きもありますが、銅メダルを争うプレーオフを戦ったマキロイ選手の



コロナ対策としてクラブハウスにて抗原検査を実施

レジストレーションにてサインを書く松山英樹



世界最高峰の舞台となった霞ヶ関カンツリー倶楽部18番ホール
健闘をたたえ合う、松山、ローリー・マキロイ、ポール・ケーシー 日本ゴルフ界初となる銀メダルを獲得した稲見



「3位になるためにこんなに頑張った事はない。オリンピックのメダリストは全く別の価値を持つもの。次も代表になれるなら躊躇なくメダリストになる為に戦います」のコメントが全てを語っていると思いますし、稲見選手も、「トーナメント優勝とは全く違う注目度を実感している」とコメントしているように、オリンピックにおけるゴルフ競技は別次元の価値を持つものとトップアスリートにも定着していくと確信が持てました。松山選手は大会直前、アクシデントに見舞われましたが、「自国開催であり、思い入れのある“霞”ですから」と万全でない状態ながら最後までメダル争いを展開してくれました。星野陸也選手も強い思いで代表の座を勝ち取り、トップスタートの重責から最後まで諦めない戦いは立派でしたし、畑岡奈紗選手も早くから東京オリンピックを目標の一つに定め、綿密な計画で大会に臨み世界のトップランカーの実力を見せてくれました。稲見選手はクールなコメントの内側に並々なぬオリンピックへの意欲を秘めて代表入りし、銀メダル獲得という快挙に結びつけてくれました。こうした選手の活躍を支えたのがオリンピックゴルフ競技対策本部に置いた強化委員会でした。



開幕前に霞ヶ関カンツリー倶楽部で練習ラウンドを行う日本選手団

日本チームの活躍を支えた強化委員会。 東京オリンピックでの活躍が次世代へ引き継がれる

委員長に倉本昌弘JPGA会長、副委員長に小林浩美JLPGA会長、代表チーム監督に丸山茂樹プロ、女子コーチは服部道子プロ、これにJGAサポートスタッフを加えた体制で支援策を検討してきました。IGFによる代表選手基準は、大会直前の6月末の世界ランキングをベースとして決定される事や、ツアープロによる個人戦という競技フォーマットを前提にすると事前の強化策には限界がある事から、主に大会期間中のベストパフォーマンスのためのサポートが綿密に検討され、暑さ対策、フィジカルケア、メンタルケアなど万全の準備がなされました。通常のツアー競技と違いプロの個人的コーチやサポートスタッフを帯同できない条件下では大きな支えとなったと思います。一方で長期的な視点で世界で戦える選手の育成強化も議論され、JGAナショナルチームも大きく変革されました。世界に通用する次世代の養成を目的とし、コーチとしての専門知識、スキルを持った外国人コーチを招聘した事で、すでにパリ大会に向けての有望な人材が数多く育つようになってきました。彼らにとっては今回のオリンピックは大きなモチベーションとなっていきます。

サポートをくださった全ての方へ感謝を

私自身は、JGAオリンピックゴルフ競技対策本部メンバーとしてスタートしたプロジェクトでしたが、自身が一人のメンバーであるKCCが開催コースとなったことで葛藤する局面も多々ありましたが、IOC、IGF、組織委員会、JOC、そしてKCC、と関係する多くの組織との調整の中で決定、承認のプロセスの複雑さに苦勞した場面も多くありました。さらに政府の五輪相、東京都知事、超党派ゴルフ振興議連、スポーツ庁、マスコミなどへの説明も度々求められるなど、オリンピックが桁違いのビッグプロジェクトであることを痛感させられました。その中で期待されていた役割がどの程度果たせたのか全く定かではありませんが、多くのサポートをいただいた全ての皆様に感謝しております。